

09 フクロウとヘラルド・トリビューン

どうしてかそこだけを、ふしぎにあざやかに覚えている。「ヘラルド・トリビューン！」と、ジン・セバークが大声で叫ぶ。パリ、マロニエの並木のつづく明るい街角。セシル・カットの髪の色は、胸にニューヨーク・ヘラルド・トリビューンという文字のあるTシャツを着て、腕にヘラルド・トリビューンを抱えている。ジャン・リュック・ゴダールの忘れたい映画『勝手にしやがれ』の、確かはじまりの場面だ。

もう一つ。パリとヘラルド・トリビューンについて深く印象にのこっているのは、パリの小さな部屋でのスーザン・ソントグ。がらんとした部屋で籐椅子にすわって、庭の見える窓のそばで、顔を曇らせたソントグが、一人黙々とタイプを叩いている。後ろの簡素なベッドのうえに、ヘラルド・トリビューン。毎朝誰かが戸口まで届けてくれるその新聞で、

ソントグは尊敬する友人の死を知ったばかりだ。そして書きあげられたのが、ソントグの文章でもっともうつくしい、ポール・グッドマンへの追悼。

一九八七年秋、雨のパリの街角でふと買いもとめたヘラルド・トリビューンは、偶然にも、そのヘラルド・トリビューンの百歳の誕生日の記念号だった。一八八七年秋、パリ・ヘラルドとして創刊され、それからニューヨーク・ヘラルド・トリビューンの名でずっと親しまれて、のちにインターナショナル・ヘラルド・トリビューンとして、世界に知られる。だが、どこの街でも読むことのできる新聞になっても、やっぱりヘラルド・トリビューンには、パリの街角が一番似合う。その日、雨のサン・ジェルマン・デ・プレのカフェで、チヨコレートつきの濃いエスプレッソ・コーヒーを一人たのしみながら、その百年に一度の記念号を、幸運な読者の一人として、わたしはたのしんだ。

百年前にヘラルド・トリビューンを創めたゴードン・ベネットという人は、フクロウの魔法にかかって一生を送ったといわれるほど、無類にフクロウを愛した人だったらしい。どんなに忙しい日々にあっても週末はかならずたぐさんのフクロウの棲む森にかまれたカントリー・ハウスで過ごし、部屋は所せましと剝製のフクロウで飾られ、絵も彫刻も、置物もさらには食器まで、ことごとくフクロウ。印章は、もちろんフクロウ。そうして、ヘラルド・トリビューン創刊に深くかわったのもまた、一羽のフクロウだった。

ベネットはずっと、ヨーロッパで英語の新聞をだそうと考えている。だが、なかなか決心がつかない。一八八七年のある夜、エリゼー宮をのぞむパリのアパートメントのバルコニーに立って考えこんでいたとき、ベネットは一羽のフクロウが夜のなかでホー、ホーと鳴く声を聴く。賛成と、フクロウが言っている。ベネットはそう思い、決断し、パリ・ヘラルドは世にでたのだそうだ。それが伝説としても、フクロウを愛したベネットが、ヘラルドの名を、シェイクスピアの「ヴィーナスとアドニス」のなかの一行、the owl, night's herald から採ったというのは、ほんとうのようだ。

ニューヨークのマンハッタンを見下ろすワシントン・ハイツに、晩年のベネットは、とてつもなく巨大なフクロウの像を建てようと考えていた。マディソン・スクエア・ガーデンをつくった建築家のホワイットの遺した計画案によると、それはフクロウの高さが百二十五フィート。台座が七十五フィート。展望台になるフクロウの目玉まで、内部を螺旋階段で上れる。ニューヨークを眼下ににらむはずのベネットのフクロウは、しかし、建てられなかった。突然、建築家のホワイ트가、妻に横恋慕する男に射殺される事件が起きて、計画は挫折し、ベネットは断念する。そしてニューヨークは、自由のフクロウを失ったのだ。

パリ、トロカデロの墓地にあるベネットの墓には、ベネットの名は刻まれていない。生

年没年の日付も、銘もない。一羽のフクロウの浮彫りが刻まれているだけだという。パリのインターナショナル・ヘラルド・トリビュン社には、社のシンボルとして、木に止まるフクロウの彫刻が、ずっと置かれていた。フクロウは、新聞の守護神なのだ。

Keep it short, keep it smart.

Noted.

Our second century started here.

二百年目の第一号の巻頭に掲げられた、いかにもヘラルド・トリビュンらしい挨拶。